

IV. 徳本上人の足跡と名号碑

1 徳本上人とは

「徳本上人」は「徳本行者」とも呼ばれ、江戸時代後期、宝暦8年旧暦の6月22日（新暦では1758年7月26日）に紀伊国日高郡志賀村久志（現在の和歌山県日高郡日高町久志）に生まれました。姓は田伏、幼名は三之丞、先祖は鎌倉幕府の有力御家人であった畠山氏とも言われています。

徳本上人は2歳の時、姉の背で初めて念仏を唱えたと言われています。また、4歳の時には友の死に無常を感じて仏教への傾倒を深くしたとも言われています。



徳本上人は27歳で現在の和歌山県御坊市にある往生寺で得度を受けて僧となると、想像を絶する荒修行を重ねました。やがて念仏を唱えながら全国各地へ衆生救済のための行脚を開始し、木食（穀物を食べることが断ち、木の実や草の実などを食べる修行）や真冬の水行、1日1合の豆や麦粉を口にするだけで1日何万遍も念仏を唱えるという厳しい修行を行ったとされています。その姿は人びとの心をとりえ、庶民はもちろん、皇族、公家、将軍家、諸大名など多くの人々の崇敬を集めました。徳川紀州家7代藩主の重倫（しげのり）は徳本に深く帰依していて、「自国内どこでも自由に布教を行ってもかまわない」としていました。また、江戸幕府11代将軍徳川家斉の実父、一橋治済も帰依が篤かったと伝えられています。

文化9（1812）年、徳本上人が和歌山の総持寺で7日間の別行（仏事）を営んだ時には、参詣者は2万人、阿波（現在の徳島県）や淡路から200隻もの参詣船が集まったと伝えられていることから、徳本の人気のほどをうかがうことができます。



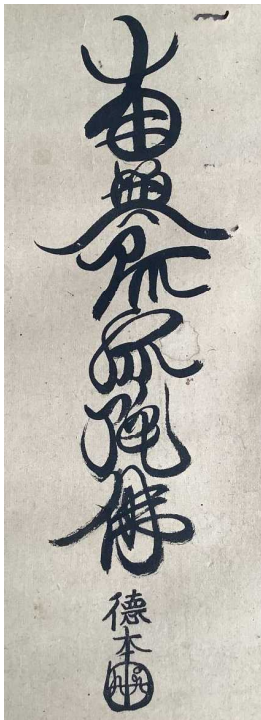
文化11（1814）年、徳本上人は江戸増上寺典海の要請により江戸小石川伝通院の一行院に移りました。一行院では庶民に十念を授けるなど教化につとめましたが、特に大奥女中の中に帰依する人々が多かったといひます。また、江戸近郊の農村を中心に念仏講を組織して、その範囲は関東、北陸から近畿にまで及びました。徳本上人は「流行神」とも呼ばれるほど熱狂的に支持され、多くの人々から崇敬を受けました。徳本上人の念仏は木魚と鉦を激しくたたくという独特なもので、「徳本念仏」と呼ばれました。

徳本上人は文化13（1816）年3月23日、武州児玉郡本庄宿（現在の埼玉県本庄市）の円心寺で「念仏百唱会」を行い、そこには1400人もの信者が集まったと記録されています。この念仏会を記念して翌年6月には、徳本上人独特の筆跡による「南無阿弥陀仏」の名号碑が念仏構中の人々によって建てられました。

同じ年の4月2日から4月6日にかけては、上田市の願行寺と芳泉寺に宿泊して布教を行っていたという記録があります。諏訪形の「カンカン石」はこの時の徳本上人の辻説法を後世に伝えるため、次の年に建てられたものであると思われます。上田周辺での上人の足跡は以下のとおりです（田口義称氏の資料による）。

- | | |
|------|--|
| 4月2日 | 前泊地である追分宿本陣から小諸宿、田中宿、海野宿で休憩を取りながら、午後4時過ぎに上田願行寺へ。 |
| 4月3日 | 上田藩に芳泉寺での宿泊と化益（布教）、坂城西念寺への立ち寄り、坂城心光寺での宿泊と化益を願い出て、認められた一方、坂城西教寺での請待（客としてもてなすこと）と屋代生蓮寺での宿泊と化益は認められませんでした。上田願行寺に宿泊し、3座の化益を行った（場所は不明）記録があります。願行寺泊。 |
| 4月4日 | 上田藩の役人、女性、子どもなどを対象に3座の化益を行った（場所は不明）記録があり、多くの人々が参加したと記録されています。願行寺泊。 |
| 4月5日 | 3座の化益を行った（場所は不明）記録があります。願行寺泊。 |
| 4月6日 | 2座の化益を行った（場所は不明）記録があります。上田塩尻村通行の折「十念（「南無阿弥陀仏」を10回唱える作法）」の作法を行いたいという願いを出しています。芳泉寺泊。 |
| 4月7日 | 地蔵堂で芳泉寺の隠居のために「十念」を行った後、塩尻を通過して坂城中之条の西念寺へ向かいました。 |

その後、徳本上人は現在の松代を経て長野市や安曇方面を経て松本に入り、6月22日から7月1日まで滞在して生安寺を中心に化益（布教）を行いました。28000人もの人たちがそのご利益にあずかったと伝えられています。その影響もあってか、松本市内には73基もの「徳本名号塔（名号碑）」が存在しています。



徳本が書いた「南無阿弥陀仏」の字体は全体に丸みを帯びており、縁起が良いものと言われました。また、徳本が薄手の紙に書いた「南無阿弥陀仏」の名号を水に浸して飲み込むと霊験あらたかで、病が治ったり産後の肥立ちが良かったりで「拝伏名号」と呼ばれました。徳本はその生涯に18万枚もの拝伏名号を書いたとされています。上田に逗留中も9000枚もの拝伏名号を書いたとも伝えられています。



なお、地蔵菩薩の絵が描かれた紙を飲み込むことで病気などの治癒を祈願するという信仰は、現在でも東京巢鴨の高岩寺、通称「とげぬき地蔵」などでも行われているとのこと。

徳本上人は晩年、度々俳人小林一茶と旅をしていました。当時、徳本の食事は1日に1合のそば粉のみであったことから、一茶は「徳本の 腹を肥やせよ そばの花」と詠んでいます。

徳本上人は文政元年旧暦の10月6日（新暦では1818年11月4日）に亡くなりました。墓所は東京信濃町の一行院にあります。また、徳本上人が生まれ育った和歌山県日高郡日高町には現在も生家の跡や得度した寺院、上人を慕う民衆が建てた石碑などが数多く残り、当時の様子を伝えています。徳本上人の辞世の句は「南無阿弥陀仏生死輪廻の根をたたば 身をも命もおしむべきかは」でした。

【コラム 徳本はふたりいた！】

今回のテーマは「徳本上人の名号碑」ですが、室町時代から江戸時代の初めにかけてはもうひとり、人々からの尊敬を集めた「徳本」がいました。ここでは、その「永田徳本（1513～1630）」のエピソードを紹介させていただきます。もちろん、「カンカン石」や「名号碑」とは直接関係ありませんが、どちらの「徳本」も貴賤の区別なく人々を救おうとした、ということでしょうか。

さて、もうひとりの「徳本」、永田徳本は永正（えいしょう）10（1513）年、三河大浜（現在の愛知県東部）の生まれ（甲斐国谷村など異説もあるようですが）で、知足斎、乾室と号しました。陸奥国で仏門に入り、出羽（鹿島という説も）では修験道を学びました。また、田代三喜、玉鼎らから、当時明からもたらされた漢方医学を修めました。



この時代はいわゆる「戦国時代」にあたり、「永正の錯乱」や「両細川の乱」など、世の中が不安定な時代でした。徳本は甲斐国に移り住み、国主であった武田信虎、信玄二代の侍医を務めました。武田信虎の領国追放後は信濃国諏訪に住みました。

伝承によれば、徳本は首から薬袋を提げ、牛の背に横になって「甲斐の徳本 一服十八文」と言いながら駿河、甲斐、相模、武蔵などを回って薬を売り歩き、病人の治療に当たりました。貧しい人々には無料で薬を与えたり安価で治療を行うなどして、権勢にこびることなく人々を病苦から救ったことから「医聖」とも呼ばれ、尊敬を集めていました。また、どんな治療を行っても報酬として18文（16文ともいう）以上の金額を受け取らなかったと伝わっています。時の将軍徳川秀忠が病の時、御殿医たちが手を尽くしたものの効果がなかったときに、徳本によってたちまち平癒し、将軍が大枚の褒美を与えようとしたことに対して徳本は断り、「18文」だけを要求したなど、その人生は伝説と謎に包まれています。



徳本は本草学にも通じ、103歳のころに甲斐における葡萄栽培法の改良（ぶどうの棚架け法）も行ったとする説があります。

徳本は晩年、信州東堀村（現在の岡谷市東堀）に住み、寛永7（1630）年、118歳で亡くなったと伝えられています。これが正しいなら、驚異的な長寿と言えます。亡くなった後は現在の岡谷市長地柴宮の尼堂浄園（尼堂墓）に埋葬されました。この場所には現在も墓碑が残っており、「いぼの神様」「おこりの神様」として知られています。左の画像中央が永田徳本の墓です。残念ながら墓碑は傷みが激しく、刻まれている文字を読むことは困難です。

また、上高地への旧道「徳本（とくごう）峠」も「徳本」の名にちなんだものという説もあります、とされていますが、この「徳本」はどちらの「徳本」のことなのかは不明です。

「wikipedia」では、株式会社トクホン（現在は大正製薬の完全子会社）が製造販売している「トクホン」は「室町時代後期から江戸時代初期にかけて活動した医師で、医聖の異名を取る永田徳本から名を取った」と紹介されています。徳本上人との関連はないようです。

なお、『上田城下町歴史地名大鑑（滝澤主税著）』では、諏訪形の徳本上人名号碑について「徳本は甲州の人」とされています。徳本上人と永田徳本とが混乱したものではないかと思われる。

2 徳本上人の名号碑について

「南無阿弥陀仏」の6文字が刻まれた碑を「六字名号碑」と呼びます。「念仏行者徳本上人研究会」によると、独特の書体で書かれた「徳本上人の名号碑」は全国で1641基残っているとのこと。都道府県別では長野県がもっとも多く490基、上人の出身地である和歌山県が260基です。長野県内では長野市には96基、松本市では前にも述べたとおり73基の名号碑が確認されています。『諏訪形誌』発刊当時、上田市には諏訪形の「カンカン石」など6基の名号碑が残されていると考えられていましたが、その後、中之条に2基の名号碑があることが確認されました。さらにその後の調査で浦里地域や塩尻地区などで4基が見つかり、上田市内に全部で12基の名号碑があることがわかりました。なお、名号碑の調査にあたっては、長野市在住の田口義称氏の『長野県内の徳本上人名号塔所在地図（Web版）』などを参考にさせていただきました。



3 上田市内にある徳本上人名号碑

(1) 通称「カンカン石」

諏訪形の徳本上人名号碑、通称「カンカン石」について『諏訪形誌』282ページから引用します。

文化14年（1817）の銘のある独特の字体で彫られた「南無阿弥陀仏」の石碑が法泉海道と道又木地籍の境に建てられています。

この石碑は徳本上人（1785～1816）という浄土宗の僧侶が、文化3年（1806）の春から秋にかけて信濃国へ教えを説いて歩いた際、諏訪形の地に立ち寄って説法をしたことの証として建てられたものです。

石碑の裏面には「願主 西心」「世話人柳澤松達・荒井政吉村中」などと彫られています。僧籍のある西心という人の呼びかけに応じて世話人の二人が中心となって浄財を集め、碑を建立したものと思われます。石材は自然石で、高さ1.5m、幅1.6m、やや菱形で厚さも薄く、叩けばカンカンと音がするので、いつしか「カンカン石」と呼ばれるようになって親しまれてきました。



平成29年（2017）5月、カンカン石周辺の道路拡幅工事にあわせて名号碑建立200年の記念祭が行われました。

注：『諏訪形誌』の「文化3年（1806）の春から秋にかけて信濃国へ教えを説いて歩いた」という記載は「文化13年（1816）」の誤りと思われます。

【コラム「カンカン石」はなぜこの場所に？】

これから紹介するように、上田市内には12基の「徳本上人名号碑」が確認されています。これらの名号碑の多くは寺の境内や墓地の近くなどにあるのですが、ご存じのとおり諏訪形の「カンカン石」は古い街道（別所街道）沿いとは言え、路傍の何もない場所に建っています（中之条の名号碑のうち1基は「カンカン石」と同様に、古い街道（保福寺街道・別所街道）沿いに、越戸の名号碑も古くからの道路沿いに、それぞれ建っています）。なぜ、諏訪形の名号碑はこのような場所にあるのか、もしかしたら「カンカン石」のある場所にも寺院かそれに類する施設があったのではないかと、そんな疑問もわいてきます。

これについて、諏訪形誌刊行委員長北沢伴康さんは若いころ道普請の折などに、大正生まれの先輩から「カンカン石がある場所には小さな庵があって、仏門に入っているらしい女性が住んでいたそうだ」という話を聞いたことがある、と話しています。それらの伝聞などを総合すると「江戸時代、「カンカン石」が建立されたころには、この場所に小庵があり、そこには「カンカン石」建立の願主、西心（比

丘尼)に連なると思われる人が住んでいて、宗教的な職能を果たしていたらしい。また、この庵は明治の初期まで残っていたようだ」という話になります。

しかし、北沢さんは「自分と同年代(昭和初期の生まれ)の人たちで、「カンカン石」の近くに住んでいた人でも、この「小庵」やその住人についての話を聞いたことがあると記憶している人はいないので、自分の思い違いだろうか…」とも話しています。このような昔の記憶を持つ方々がだいぶ少なくなってしまった今、この話の真偽を確認することは難しくなっているかもしれない、残念です。

また余談ですが、前述のとおり道路拡幅事業によって「カンカン石」はもとあった場所から数m北側に移設されましたが、移設後、名前の由来ともなった「たたくとカンカンと音がする」の音の響きが悪くなってしまったのではないかと、との話もあります。

なお、『諏訪形誌』で「カンカン石」建立の世話人となっている荒井政吉は村役人ではないかと考えられます。『諏訪形誌』61ページにある「文化8(1811)年に無許可で旅館業を営んだとして訴えられた」4人の中には荒井政吉の名が見られます。もうひとりの世話人、柳澤松達については、よくわかっていません。

(2) 功德山願行寺(大門町)

願行寺の創建は不詳です。伝承によると、千曲川太鼓淵(岩下地籍)付近の川底で村人が一光三尊の阿弥陀如来像を見つけ、当時の領主滋野氏に献上したのが始まりとされています。その後、滋野氏の後裔である海野小太郎が海野郷岩下(現在の上田市岩下)に御堂を造営して、松誉炭香上人を招き、この阿弥陀如来像を本尊として「功德山願行寺」を開山しました。

以来、願行寺は海野氏に庇護されて隆盛しましたが、天文10(1541)年、当主海野幸義は武田信虎、村上義清、諏訪頼重の侵攻によって討死し、願行寺もその兵火によって多くの堂宇、寺宝、記録などが焼失してしまいました。唯一、本尊の阿弥陀如来像のみが難を逃れました。



願行寺 徳本上人名号碑

上田駅…550m…中央2丁目信号…450m…願行寺



天正14(1586)年、海野氏の血を継ぐ眞田昌幸が上田城を築城した際、城下に炭譽道山上人(山梨県甲府市帰命院の僧侶)を招いて中興開山し、願行寺は眞田家の庇護により再び隆盛して、元和7(1621)年には上田城下町整備の一環として現在の地に再建されました。また、寛永2(1625)年には住職の霊夢のお告げがあり、本尊の阿弥陀如来像を秘仏として、新たに前仏を勧請しました。

宝永3(1706)年に松平氏が上田藩主となると、願行寺は松平氏の菩提寺として篤く信仰され、広大な境内には多くの堂宇が建てられました。また、境内の一角には墓域が設けられて、藩主だった松平忠済や松平忠固の墓碑も建てられました。

大正14(1925)年、都市整備のために大門町通りが開削された時に願行寺の境内は分断され、規模が縮小されてしまいました。この時、元和年間(1615~1624)に造営された本堂も取り壊されました。その後、願行寺の墓地を諏訪形に移転しようという計画があった経緯については『諏訪形誌』の197ページに述べられているとおりです。

現在ある願行寺四脚門は享保3(1718)年に再建されたもので、「大門町」の名はこの門があることからつけられたとのこと。門は切妻、本瓦葺き(寛永7年に本瓦葺に葺替)、正面に軒唐破風を設

えた格式の高いもので、昭和43（1968）年に上田市指定文化財となっています。願行寺には寺宝も多く、鎌倉時代末期から室町時代初期作の「銅造善光寺如来一光三尊立像」は、昭和43（1968）年に上田市指定文化財に指定されています。また、「火伏せの観音様」と呼ばれて信仰されている「木造菩薩立像」は鎌倉時代初期に制作されたもので、平成6（1994）年に上田市指定文化財に指定されています。

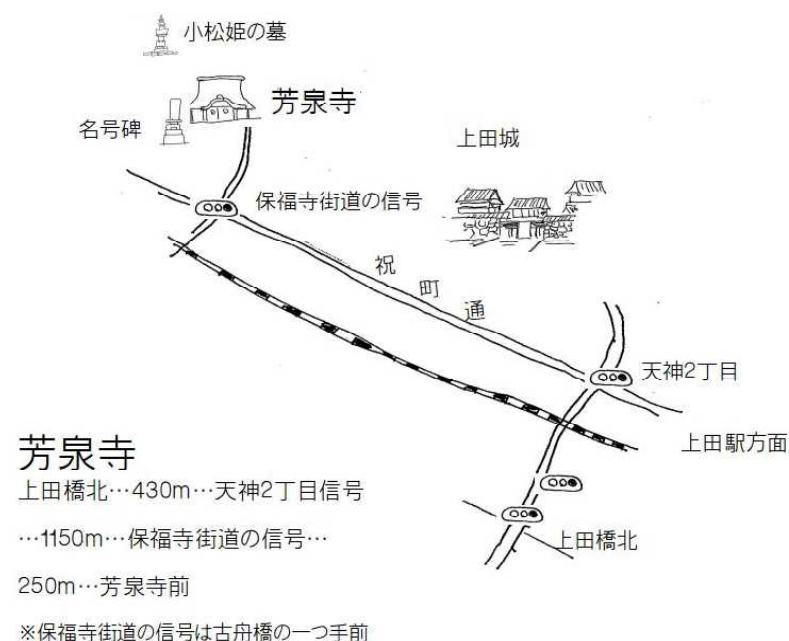
願行寺の「徳本上人名号碑」は、大門町通りをはさんで、願行寺四脚門の反対側に設置されています。両側には「馬頭観音」と「筆塚」もあります。

また、願行寺にはもう1基、墓地内に無縁仏が集められている一角に名号碑が建てられています（右写真）。この名号碑には「平成十五年春彼岸 建立」と刻まれていて、新しいものです。ただ、平成15（2003）年にも名号碑が建てられたということは、徳本上人の教えが現代にも息づいていることの証明とも言えるかもしれません。



（3）松翁山圓覚院芳泉寺（常磐城）

「芳泉寺」は天正11（1583）年、眞田昌幸が上田城の築城に際して小県郡下之条村（現在のの上田市大字下之条）にあった「全称院」を上田城下に移転して、「常福寺」と号したのが始まりとされています。眞田信之が上田城主となると、この寺を眞田氏の菩提寺としました。元和6（1620）年に信之の妻、小松姫が亡くなると、この常福寺を含む三つの寺に分骨され、小松姫の一周忌の際には常福寺に霊廟が設けられました。その後、元和8（1622）年には信之の松代移封に伴って小松姫の霊廟は松代城下の「大英寺」に移転されました。



芳泉寺

上田橋北…430m…天神2丁目信号

…1150m…保福寺街道の信号…

250m…芳泉寺前

※保福寺街道の信号は古舟橋の一つ手前

小諸城主だった仙石忠政が眞田信行に代わって上田に入封すると、仙石氏の菩提寺である「宝仙寺」を当地に移転し、眞田氏の庇護の下にあった「常福寺」をもとあった小県郡下之条村に戻しました。寺号が「宝仙寺」から「芳泉寺」に改められた時期は定かではありませんが、仙石忠政が小諸から移転した直後とも仙石忠政の嫡男仙石政俊の死後ともいわれています。また、江戸期には浄土宗の総本山である知恩院の末寺として、上田領の触頭（ふれがしら）の役割を担っていました。



かも「徳本上人の名号碑である」という表示がされていないので、少しばかりわかりにくいかもしれません。

また、本堂を左（南）側から裏手に回り込むと「小松姫の墓」があり、参拝することができます。なお、「案内地図」の「保福寺街道の信号」には地名表示はありません。

(4) 無量院天照山専念寺(下室賀)

上田市下室賀の専念寺は万治元(1658)年に仏眼上人が開山、創建したといわれる古寺です。火災に遭っていないため、現在の本堂はその時に建立されたものですが、昭和44(1969)年にはかやぶき屋根をトタン板で覆う補修工事をしました。また、火災がなかったため過去帳が全部そろっている、とのこと。



えたものです。また、境内の鐘楼西側には六地藏が安置されています。

徳本上人名号碑は山門の手前、六地藏と隣接した場所に建立されています。大きな自然石に彫られた、立派な名号碑です。

また、この寺に祀られている「聖観音像」は「池に入れられた観音様」とも言われ、かつて日照りの時はこの観音様をかつぎだし、下室賀の樋之詰大池に入れて雨乞いをしたと伝えられています。また、明治22(1889)年に室賀の村民が建立した「天明の義民・小山磯之丞」の幕碑もこの寺の境内にあります。

専念寺へは、青木に向かう国道143号線から室賀への道路(「ささらの湯」に向かう道)に入り、2.3kmほど行くと右手に「専念寺」の案内標識があるところを右折します。駐車場に車を置き、専念寺山門前につづく道(「旧東山道」の跡と考えられています)に入ると、山門に向かって左手に大きな「名号碑」があります。



専念寺

国道143号線小泉信号…2.3km…

案内板…250m…専念寺駐車場

(5) 観音寺(上田原)



観音寺

県営球場前交差点から約500m

観音寺は県営上田球場の近くにあります。このあたりは天文17(1548)年2月、武田信玄と村上義清が戦った「上田原合戦」の古戦場です。観音寺の伽藍はこの上田原合戦で焼失してしまったため、残念ながら寺の創建などについての資料は残っていません。本堂は約200年前に建て替えられたもので、本尊は聖観音菩薩像です。



また、本堂の横には大師堂と護摩堂が建てられています。境内にある、樹齢200年といわれる大きなイチヨウの木は寺のシンボルとなっています。

六地藏の前を通過して山門に入り、本堂に向かって左側に「徳本上人の名号碑」があります。この寺にある名号碑は、ちょっと諏訪形の「カンカン石」と似た形をしていて、親近感を覚えます。

なお、徳本上人の名号碑は一般的には浄土宗の寺院に建立されていますが、この観音寺は真言種の寺院です。真言宗の寺院である観音寺に名号碑が建てられている理由は不明ですが、例外的なものであると考えられます。

(6) 田中山常福寺(下之条)



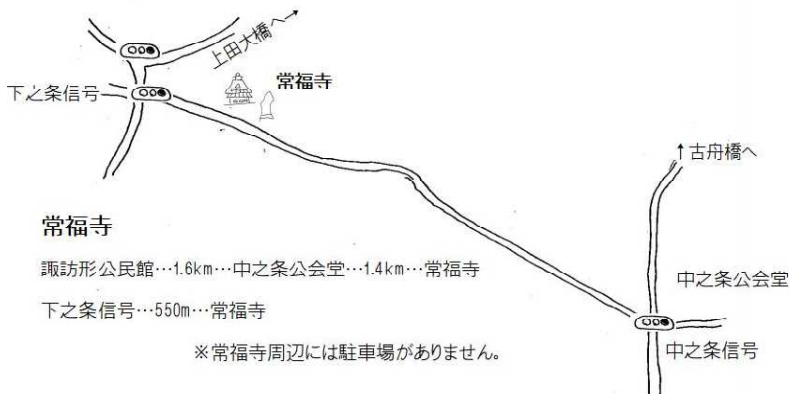
「常福寺」の開山は道公和尚と伝えられています。古くは田中地籍にあった寺ですが、真田家の菩提寺となったことを機に、常磐城の現在芳泉寺がある場所に移されました。現在の「芳泉寺」は開創当時に「常福寺」と名づけられていたことは「芳泉寺」の項で述べたとおりです。

別所温泉の常楽寺、安楽寺、現在は存在しない長楽寺の「三楽寺」に対し、常福寺は大福寺、真福寺とともに「三福寺」のひとつとして人々の崇敬を集めるとともに、千曲川の「古舟の渡し」を超えて善光寺へと向かう街道の祈願

所ともなっていました。



慶長5(1600)年、真田信之は現在の宝泉寺がある場所にあった常福寺を菩提寺としました。元和6(1620)年に亡くなった小松姫の遺骨はこの常福寺に納められ、埼玉県鴻巣市の勝願寺と群馬県沼田市の正覚寺にも分骨されました。



現在、下之条にある常福寺は、真田家に代わって仙石忠政が上田に入った時に常磐城から現在の場所に移され、再建されました。しかし、万延年間(1860年~61年)の火災によって堂宇を焼失してしまい、現在の本堂は仮本堂です。

またこのあたりは村上義清と武田信玄が激しく戦った「上田原合戦」の地で、

江戸時代になっても合戦で亡くなった人々の遺骨などが多く残されていた場所です。このようなことを地域の人々が悲しく思い、名号碑や六地藏を建立したということが、この名号碑の裏面に刻まれています。

常福寺 徳本上人名号碑 裏面の金石文

我が邑は往昔武田村上合戦の地也。所謂上田原の戦是也。今に村外の墾田に溝を掘れば、即ち骸骨、兵刃が夥しく摺け腐朽する者多く土中より出土す。乃ち当時戦死者多く古墳と為すや。存るは今僅かに三有り。為に東に在るは板垣信形之墳と為し、西に在るは小島某の墳と為す。中に在る薜荔の壟の者、某氏の墳と知る者有らず、或いは言う矢代源吾の墳と言う也。右の墳は而して之を祭る者無し。即ち空しく化して野土と為す。骨摧砂礫に混じるは、其の誰が之を弔わん也。嗚呼惨たるかな。我が邑は、其の地に於いて其の土を耕す。我而うして之を弔わす。即ち誰か又之を弔わん哉。頃者闔邑相共に謀りて各名号石を邑の十王堂に建て、毎月聚りて念仏百万遍を修め、戦死者の潜霊を弔わざらんや。以て之を為す。依って庶幾は永世廃絶せざれ矣と。

文化十四年丁丑夏四月二十四日

南 旭齊 撰 印
掛山源公輝 隸 印

この由緒ある寺も現在は無住で中古車販売店の一部になっており、残念ながら寂しい寺となっています。けれども、境内に立つ「徳本上人の名号碑」と六地藏はなかなか立派なものです。訪れる場合、近くに駐車場などはないので注意が必要です。

（７）姥懷庚申坂の名号碑（中之条）

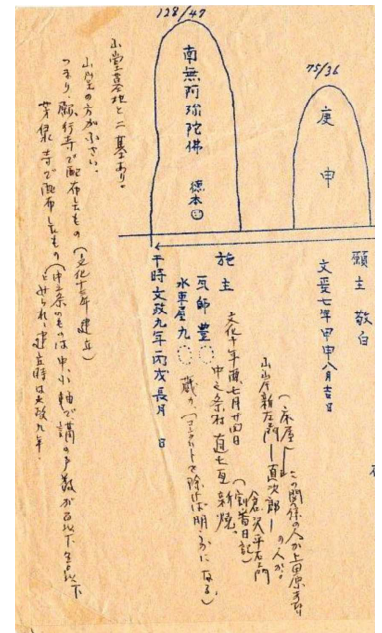
注：「姥懷（うばふところ）」は中之条地区内の小字名

『諏訪形誌』発刊後、顧問北沢伴康さんの文献調査により、『中之条誌』に「中之条地区に徳本上人名号碑が存在する」という記載があることがわかりました。この記載についての調査を進める中で、中之条自治会長中澤伸夫さんと『中之条誌』執筆者（編集委員長）の中沢賢さんから、ご助言と資料提供をいただき、中之条地区には2基の「徳本上人名号碑」が存在することがわかりました。

中沢賢さんからは、故中沢恵太氏が亡くなられた後、ご遺族の同意を得て調べさせていただいたメモに、中之条にある「徳本上人の名号碑」について、以下のような記述があるという情報をお寄せいただきました。部分的に引用します。

南無阿弥陀仏の徳本上人の碑はこの姥懷のほか山堂（大字中之条地籍の小字名）にもあったことがわかりました。山堂といえば墓地や葬儀関連の道具の建物、牛の爪切り施設など個人所有でない土地がありました。国道拡張の際にその地が一部移転整備されたので、現状は現地調査をしてみないと分かりません。

中沢恵太氏のメモを解釈すれば、中之条の徳本上人の2基の石碑は、願行寺と芳泉寺で配布したものである。念仏講の参加人数は、願行寺より芳泉寺の方が多いため、碑の大きさも姥懷の碑の方が大きいと恵太氏はメモしている。建立年は山堂の碑は文化13（1816）年、姥懷の碑は文政9（1826）年である。



『中之条誌（中之条誌編集委員会2017（平成29）年刊）』に、以下のような記述があります。320～324ページから部分的に引用します。

四 姥懷庚申坂の石碑群

旧古舟橋から旧町通り（東町、西町にはさまれた通り）を抜け、別所街道を進むと緩やかに曲がる姥懷の庚申坂に出る。その坂道の北側に30度から60度ほどの南向き斜面がある。その斜面に沿って2群の石碑が並んでいる。

平成20年後半頃までは中之条自治会、中之条自治会長OB会が年末の草刈り、清掃などを行っていた。現在は西側の石碑群は雑草におおわれ、東側の石碑群は繁茂する竹に囲まれている。

本石碑群については昭和後期に中之条自治会による調査が行われ、その報告書が残っている。今回（平成28（2016）年）の調査では石碑の文字等は経年変化判読が難しいので、当時の報告書を全面的に参考にした。

以上の記述に続いて「西側の各石碑」として、幅約14mに9基の石碑と、「東側の各石碑」として、幅約4.5mに5基の石碑が、下図のように並んでいくことが紹介されています。

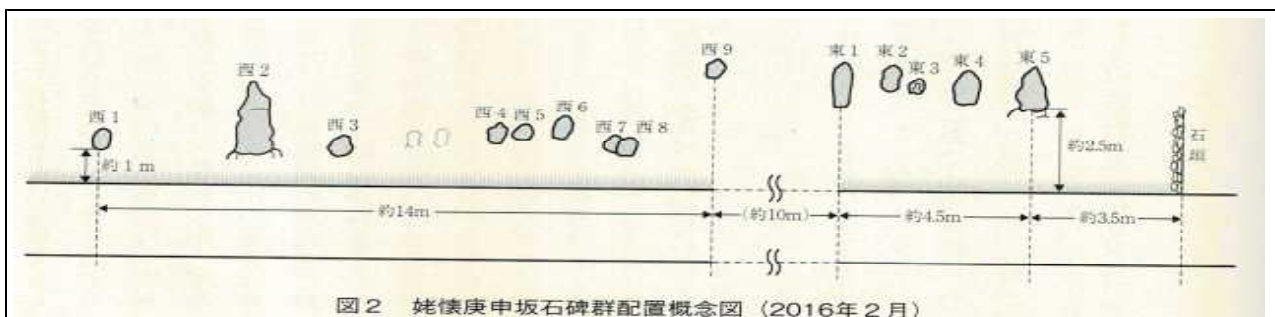


図2 姥懷庚申坂石碑群配置概念図（2016年2月）

『中之条誌』に掲載されている図版

また、『中之条誌』ではそれぞれの石碑について、以下のように記録されています。

- 西1：庚申塔
西2：壽水斎翁壽歳碑（1872（明治5）年）
西3：馬頭観世音（1883（明治16）年）
西4：馬頭観世音
西5：馬頭観世音（1883（明治16）年）
西6：道祖神（1927（昭和2）年、小坂井組のものを現在地に移転）
西7：馬頭観世音（1873（昭和6）年）
※西暦と和暦が違っているので、どちらかが間違いと思われます。
年号から考えて、「明治6年」が正しいのではないかと推察できます。
西8：馬頭観世音（1891（明治24）年）
西9：馬頭観世音
- 東1：南無阿弥陀仏（1826（文政9）年）
東2：庚申（1824（文政7）年）
東3：石像（天明■■■）
※天明年間（1781年～1789年）
東4：庚申（寛政庚申（1800年））
東5：奉納大乘妙典本斎翁■■■（1781（安永10）年）



この「姥懐庚申坂」は、旧保福寺街道の入り口付近にあたります。保福寺街道は、旧東山道をなぞるかたちで上田城下から上田市浦野、青木村、保福寺峠を経て岡田宿（松本市）までの約33kmを結ぶ街道で、現在でもあちこちに石仏群や昔の街道筋を偲ばせる景観などが見られます。「姥懐庚申坂の石碑群」もそのような、人々の往来が盛んだった場所に、街道の目印として設置されたものではないか、と『中之条誌』を編纂された中沢さんは考えているとのこと。諏訪形の「カンカン石」も別所街道沿いと思われる場所に建立されていることとの共通点もありそうです。なお、このような石碑群は築地地区にも残っています。

「姥懐の庚申坂」東側から見た 西側の石碑群

編纂された中沢さんは考えているとのこと。諏訪形の「カンカン石」も別所街道沿いと思われる場所に建立されていることとの共通点もありそうです。なお、このような石碑群は築地地区にも残っています。

「姥懐庚申坂」について、『もくず会報31号（2020（令和2）年9月10日刊）』には以下のように記述されています。

御所堤防と中之条堤防の境目辺りから川向こうに向けてかつて木製の旧古舟橋が架けられていた。その辺りは江戸時代目尻町と呼ばれ、それから宮川を越え南に向かう通りは東側が東町、西側が西町と称され、松本に通じる幹線道路松本街道（保福寺街道）として栄えた。

南に向かうその街道はじきに江戸時代の測量の起点である小字関石（現在の西沢誠さん宅附近）の三叉路を右折して西に向かう。これを曲がらず直進するのが北向観音堂道（別所街道）である。この道は上田原の段丘上へと緩く右旋回して登る。

その辺りは回り込んだ段丘の南向きの急な斜面で、北風を防ぎ冬でも暖かいので、老婆の懐のようだと親しまれ、一帯は姥懐と呼ばれ、この坂の道沿いに庚申等が並ぶので古くから庚申坂と呼ばれた。この道沿いの傾斜地には江戸時代から明治～昭和にかけて、各種の石碑石像が寄進建立され、今ではこの地の歴史を検証する、貴重な歴史遺産となっている。

8基あった馬頭観世音は農耕や運送に使ったウマの死を悼んで立てた供養碑である。

3基ある庚申塔は220年前の碑も現存、庶民の信仰を研究する貴重な資料である。

ひととき大きな高さ2.1mの碑は、梅の水墨画の大家で文化人、中之条出身の西沢練斎翁の顕彰碑である。門弟達が明治5（1872）年に建立。当時の青年達が師を敬慕し建立した顕彰碑は近郷各地にあり当地方の教育文化史研究上重要な遺産である。

その他各種の碑を含めこの場所には240年前から昭和に至る14基の石碑が保存されており、これだけの多数の古くからの石碑の集積は東信地区でも珍しいでしょう。

執筆・資料提供：中沢賢氏 注：『もくず会報』は中之条老人会機関紙

【コラム 保福寺街道（松本道）】

中之条地区に残る名号碑は、保福寺街道と、中之条地区で保福寺街道と別れる別所街道近くに建てられています。

上田と松本を結ぶ保福寺道は、松本側からは上田道、上田側からは松本道・保福寺道と呼ばれていました。もともと古代の駅路としての東山道とほぼ同じ道筋であったこの道は、江戸中期ころまでは松本藩の城米輸送や藩主の参勤交代にも活用されていました。

『上田市誌 近世の交通と上田宿 第1節 主要な道路 保福寺道（6ページ）』

保福寺道が北国街道の西脇新町で分岐する地点にある万延元年（1860）の道標には「北向観世音道」と書かれています。中之条の字関石で保福寺道と分岐した道は、庚申坂を上り、上田原村の長池の土手を通り…以下略

『上田市誌 近世の交通と上田宿 第1節 主要な道路 別所道（7ページ）』

「保福寺街道」は西脇新町（上田市常磐城）で北国街道と分かれ、青木村、保福寺峠、旧四賀村（現在の松本市四賀）を経て、松本市の岡田宿で善光寺西街道（北国西往還）に合流する約33kmの街道で、律令制時代に整備された「7街道」のひとつ、東山道とほぼ同じ経路であると考えられています。江戸時代には松本藩主の参勤交代にはこの道が使われるなど、主要な街道のひとつとなっていました。北国街道と保福寺街道の分岐（上田市常磐城）には万延元（1860）年に建立された「北向観世音道」の道標（右写真）があり、案内板には「明治28（1895）年に上田橋ができるまではこの道が松本や別所温泉方面へのメインストリートだった、という内容が書かれています。



注：実際には上田橋は明治23（1890）年に初代の橋が完成したのですが、2年後に大水で損壊して一部通行不能となってしまう、明治28（1895）年にあらためて開通した、という歴史があるようです。

街道近くには芳泉寺、諏方泉神社（諏訪部）もあり、中之条側には宮川神社もあって、往時の様子も思われます。また、保福寺街道には、浦野宿や保福寺宿に古い家並みが残っており、沿道には古刹や石仏群なども見られます。



「日本アルプス」を母国イギリスをはじめ世界中に広く紹介した（命名したのは別人）ことで知られるウォルター・ウエストンは、初来日したとき、来日3年目（1891年・明治24年）に上田からこの「保福寺街道」を通って松本市に入っています。この時、保福寺峠から見た北アルプスの姿に深く感銘を受けた、と自らの著書『日本アルプス 登山と探検』の中で語っています。現在、保福寺峠の南側に、ウエストンを記念するレリーフ（石碑）が建てられています。なお、ウエストンは「浦野宿までは快適だったがその先は悪路でたいへんだった」とも記しています。

さて、『もくず会報31号』には「御所堤防と中之条堤防の境目辺りから川向こうに向けてかつて木製の旧古舟橋が架けられていた」と記載されています。上の写真のあたりでしょうか。東山道の渡渉点とされる場所（現在の古舟橋北詰ローソン常磐木3丁目店付近）と旧古舟橋の場所はやや異なるようです。右の地図は明治初期の中之条村のものですが、この地図の極楽寺の位置などから考えると保福寺街道は現在の南小学校付近を通っていたものと思われます。



中之条村全図（長野県立図書館「長野県明治初期の村絵図・地図アーカイブ」より 一部を転載）

さて、ここで取り上げたいのは『中之条誌』に「東1 南無阿弥陀仏」として記録されている石碑についてです。『中之条誌』323ページの写真（昭和の後期に撮影されたとされるもの。右の図版は『中之条誌』より）では、文字などははっきりと読み取ることができないものの、石碑の文字は徳本上人名号碑に共通する独特の書体で書かれていることがわかります。

碑文について『中之条誌』では「南無阿弥陀仏 徳本■ 施主 瓦師豊■ 水車屋九■ 文政九年である」と記載されています。また、故中沢恵太氏のメモには、この名号碑は「文政9（1826年）年に芳泉寺から配布されたもの」とであると書かれています。

なお、諏訪形の「カンカン石」は1817（文化14）年の建立となっていますから、姥懐名号碑の建立は諏訪形のカンカン石建立の9年後ということになります。

「姥懐庚申坂の石碑群」は、赤坂の信号を北（古舟橋方面）にわずかに進んだところで右（東側）側のやや狭い下り坂（姥懐の庚申坂）を少し進んだ先の道路左（北）側です。『中之条誌』で「西2：壽水斎翁壽歳碑」と記載されている、比較的大きな石碑が目につきます。また、その周囲に『中之条誌』で「西1～西9」と示された庚申塔、馬頭観音、道祖神なども見られますが、現在は行方がわからなくなっている石碑もいくつかあるようです。

右写真の2軒の建物の間の道をわずかばかり下っていくと、道路左（北）側にまず、大きな「壽水斎翁壽歳碑」（『中之条誌』の資料で「西2」とされている石碑）が目につきます（左下の写真参照）。よく見ると、この石碑の周辺には『中之条誌』で「西1」から「西9」とされている石碑が点在しています。



左の写真で「壽水斎翁壽歳碑」の奥（東側）に見える竹藪の中に「東1」から「東5」の石碑があります。ただ、藪が深いので、知らなければ気がつかずに通り過ぎてしまうような場所です。

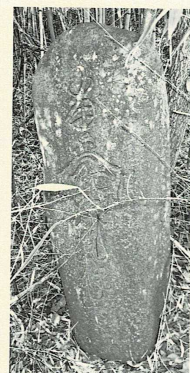
藪の東端には、比較的見えやすい場所に「東4：庚申」と「東5：奉納大乘妙典本斎翁■■■」があり、その西側、少し離れた場所に「東1：南無阿弥陀仏（1826（文政9）年）」の石碑があります（右の写真参照）。

石碑表面に見られる「南無阿弥陀仏」の文字は徳本上人の名号碑に見られる、独特のものであることがわかります。また、碑面に彫られた建立の時期からも、「徳本上人の名号碑」と見てまちがいないさそうです。上田市内に「もう1基の名号碑」があることが確認されました。



ただこの名号碑が建つ場所は私有地のため、立ち入りには注意が必要です。

なお、建立に関わったと思われる人の名前も刻まれています。どのような人だったのかについての記録は残っていないようです。



東1 南無阿弥陀仏



(8) 山堂の名号碑(中之条)

中之条在住の中沢賢さんから送りいただいた、故中沢恵太氏が残した資料では、姥懐の庚申坂以外にもう一基、「山堂(やまんど)」にも徳本上人の名号碑が残っているとされています。



山堂は中之条の小字で、中之条の信号(中之条公民館南西)周辺の様です。信号から県道77号線を70mほど西に進むと、左手(南側)に中之条の墓地があります。現地に建つ「山堂墓地の碑」には、「1992(平成4)年から1996(平成8)年にかけての県道長野上田線(県道77号線)の道路改良に伴って、この場所に移転した」と記されていますから、墓地や名号碑があったのはこの場所ではないものの、すぐ近く、ということだと思います。

地図をご覧くださいとわかりますが、現在、名号碑が面している県道77号のすぐ南側の道路は旧保福寺街道と考えられていて、このあたりが当時、交通の要所であったことが伺えます。上左の写真(中之条信号方面から撮影)で、手前に見えているのが「山堂墓地」、中央やや右寄りに見えているのが石像と名号碑です。



「山堂墓地」の北西に隣り合う場所に2基の石像・石碑が祀られています(右写真)。このうち、西(右)側の碑が「徳本上人名号碑」です。

この名号碑はやや小ぶりです。故中沢恵太氏のメモにある、「山堂の名号碑は姥懐のものよりも小さい」という記述と一致します。また、氏のメモには「この名号碑は願行寺(上田市大門町)から「配布」されたものである」と記載されています。この「配布された」という言葉の意味はよくわからないのですが、名号碑に刻された文字の印影が配布されていたということなのでしょう。徳本上人の名号碑に刻まれている文字は独特なもので、拓本などが配布されてそれを刻んだ、という意味ではないか、と解することができ

きると思います。

山堂の名号碑の裏面には「文政4年巳年正月吉日」と刻まれていることから、この年の建立であることがわかります。文政4(1821)年は、諏訪形の「カンカン石」建立の5年後です。

私たちが訪れた時にも、石碑にはお茶が供えられており、今も地域の皆さんによって大切に守られている、と感じました。



(9) 塩尻墓地内の名号碑（上塩尻）

上田市の塩尻地区は旧北国街道の面影が残る静かな町並みが続いています。明治時代には蚕種の生産でおおいに賑わった町筋でもあります。上塩尻地区と下塩尻地区の境付近に虚空蔵山東福寺（真言宗智山派）がありますが、その西隣、原家の墓地内に徳本上人名号碑があります。この名号碑には建立に関する情報が刻まれていませんが、諏訪形誌活用委員会の北沢顧問によると、「台座は江戸時代などの古いものだが、碑そのものは新しいので、後から建て直されたのだろう」とのことです。

なお、東福寺について『蚕業の先駆者を輩出した上田市上塩尻の集落と民家（小林昌人）』に以下のよう
な記述があります。



大村の集落の最も上に真言宗虚空蔵山東福寺がある。伝えによれば、この寺は元龜2（1571）年に建てられた。それまでこの村は貧しくて寺は建てられず、仏事は坂城の曹洞宗耕雲寺と上田の浄土宗芳泉寺（上田市常磐城）で行っていた。

檀家は、耕雲寺が佐藤家、春原家、菅沼家、清水家の一派など、芳泉寺が馬場家、清水家、山崎家などである。これは現在も変わりなく、菩提は両寺に置

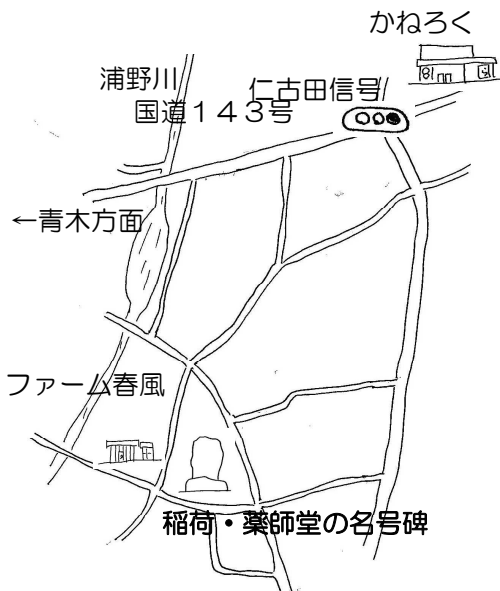
いていながら別に寺を建て、真言宗にした理由は、当時、耕地が狭く貧しい村を豊かにするためには学問をしなくてはならないと考えたからで、真言密教は文学・医学・工学・儒学を教えてくれるからという。この学問への熱意と学んだ成果がこの村を後に栄えさせた一因とされる。

なお、東福寺は茅葺きであったが昭和53（1978）年原因不明の火災で焼け、縁起や記録も失った。現在の本堂はその後の再建である。（编者一部改変）

(10) 稲荷・薬師堂の名号碑（仁古田）

浦里地区は、後述の越戸切り通しの名号碑や井澤さん宅裏山の「徳本上人記念塔」など、徳本上人と関わりの深い場所のようです。

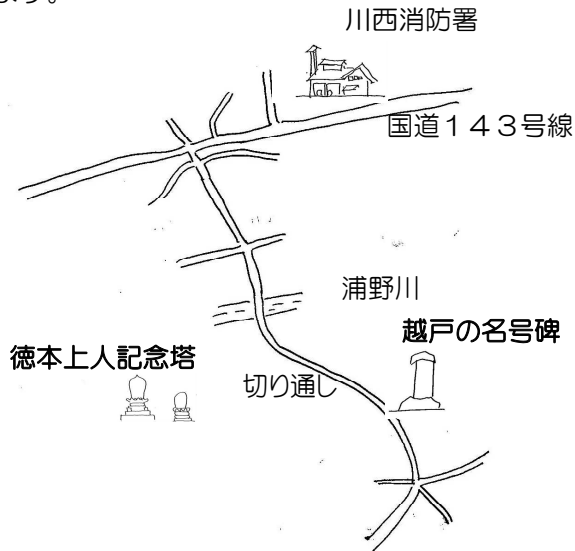
仁古田の地区内に稲荷神社と薬師堂がいっしょに建っている場所があります。この場所は地元では「薬王寺跡」と呼ばれていて、以前には寺があったようです。その参道の入口付近、鳥居のすぐ脇に、他の石碑とともに徳本上人の名号碑があります。この名号碑の側面には「文政7申年 四月六日 願主村中」と刻まれています。文政7年は西暦1824年です。



(11) 日向山墓地登り口の名号碑（越戸）

越戸地区は国道143号線の南側、ちょうど山の陰になるような地域です。現在の国道143号線は、上田市から青木村へ旧東山道や旧保福寺街道とほぼ並行するかたちで続いています。この旧東山道または旧保福寺街道から越戸地区に抜ける峠越えの道は、浦野川を渡り、小さな切り通しをぬけて越戸地区に入っていきます。この「小さな切り通し」を越戸地区に入ったすぐの道路沿い東側斜面に名号碑があります。この場所は「日向山墓地登り口」で、名号碑前の坂を北向きに上っていくと、古いお堂と大きな墓地があります。

この名号碑には「南無阿弥陀仏」のほかに、「一億三百万遍念仏供養塔 行者本誓霊場」の文字と、建立年安政6年（注：1859）が刻まれています。また、行年八十八歳「井澤●●茂●●」の文字も見られます。

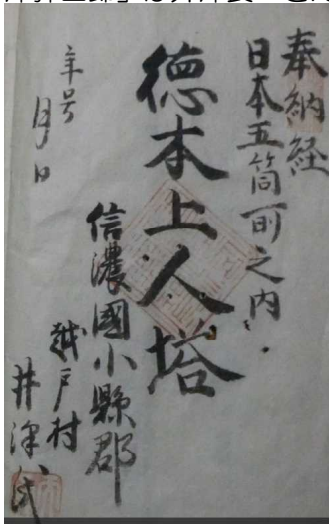


なお、日向山墓地内にある墓碑には下の写真のような、徳本上人の名号碑を模したものもあり、ここでも上人の教えが息づいていることが偲べれます。



4 徳本上人記念塔

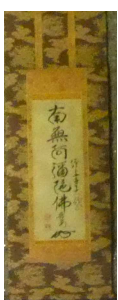
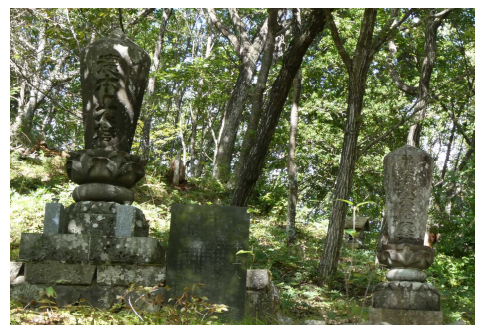
井澤良一さん（上田市越戸）の自宅北側の山の中腹には「徳本上人塔」が残っています。この塔は高さ約3m、塔の幅約90cmの石碑で、台座の正面には徳本が没した「文政元年戊寅十月六日」の文字が、横には「井澤弾四郎」の名が彫られています。「井澤弾四郎」は井澤良一さんから5代さかのぼった井澤家の当主で、庄屋を務めていました。井澤家に伝わる古文書『徳本上人塔』（左写真）には「奉納経 日本五箇所之内 徳本上人塔 信濃國小懸郡 越戸村 井澤氏 年号 月日」と記されており、諏訪形誌刊行委員会の北沢委員長は「お経を納めて塔を建てたと思われる。庄屋の井澤家を中心に熱心な信者が塔の周囲に集まって念仏講を開いたのでは」と推察しています。なお、文政元年は西暦では1818年です。



徳本上人は文化13（1816）年に上田に逗留した後、坂城や松代方面に向かい、その後長野県内各地を訪れたと記録されていることから、越戸にも立ち寄ったと考えることもできそうです。



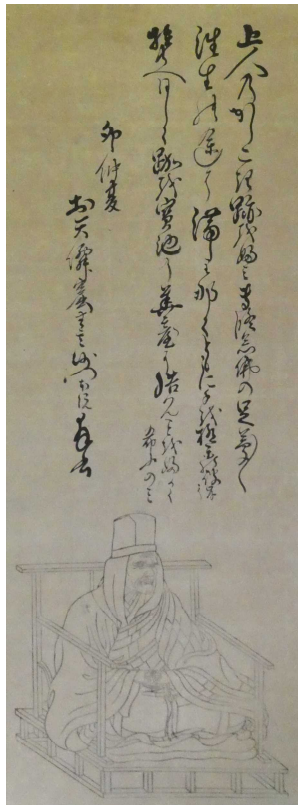
お経を納めて塔を建てたと思われる。庄屋の



井澤さんは「亡くなった父や祖父に塔の由来を聞いたことはない」そうですが、昔から毎年、暮れにはしめ飾りを飾ってきたとのこと。平成7（1995）年には石製の説明板を設置し、塔のひび割れを補修するなど、塔を大切に守っています。井澤良一さんは「先祖が残してくれたものなので長く保存していきたい」と話しておられます。また、徳本上人の塔の隣には、上人の弟子とされる「本悦」という人の記念塔も建てられています。

この「徳本上人塔」に行くには井澤さんのお宅の庭を通りぬけ、竹林と雑木林の中を裏山に登らなくてはならないので、詳しい地図は載せません。

5 井澤家に残る文書と掛け軸



卯仲夏
出天憐窟無其沙門本悦拜書

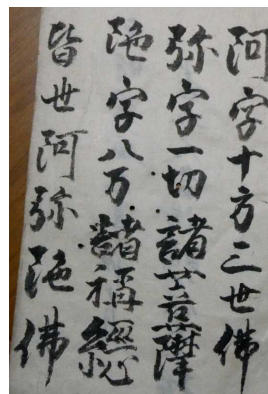
希心の三

上人乃かしこ起(き)跡越(を)婦(ふ)ニ専修念佛の足夢々
往生能(の)途丹(に)滞里那(な)くとも手起(を)極楽能(の)彼岸に
推ア(?)へ日々跏(かけ)を實實池之花臺に結ばん事をふかく

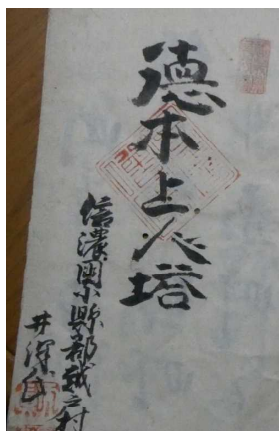
井澤さん宅には記念塔以外にも、徳本上人と関わりのある文書や掛け軸が残されています。古文書は諏訪形在住の矢島節子さんに読んでいただきました。

井澤家の床の間には左の掛け軸があります。書かれている内容は徳本上人を頌える内容となっています。また署名から、この掛け軸を書いたのは「本悦」という人と考えられますが、この「本悦」という人は上記のとおり、徳本上人の弟子とされる人物です。徳本上人図も描かれている興味深いものです。

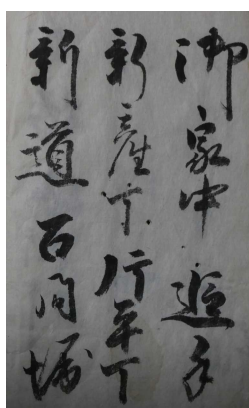
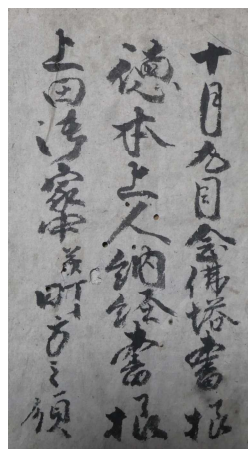
また、井澤家に残る古文書は以下のとおりです。



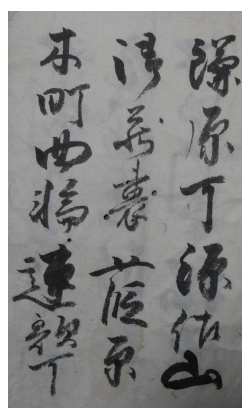
阿字十方三世佛
弥字一切諸菩薩
陀字八万諸稱經
皆世阿弥陀佛



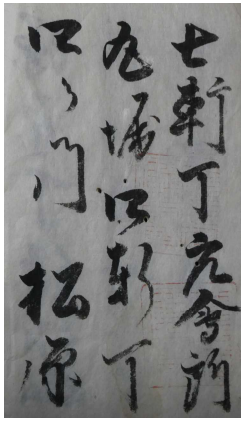
十月九日(?)念佛塔書様
徳本上人納経書様
上田御家中并町方之順



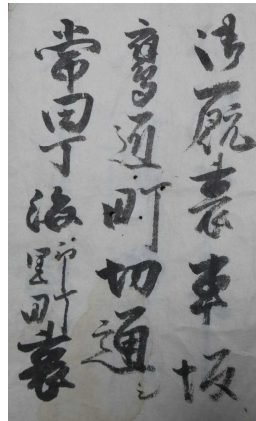
御家中 追手
新産丁 片平丁
新道 百間堀



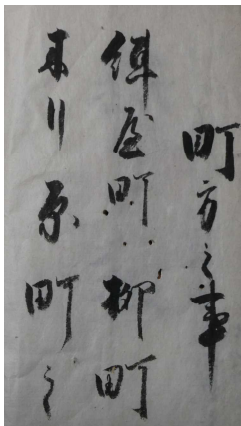
鎌原丁 源佐山
御蔵裏 葎(?)原
木町 曲輪 連歌丁



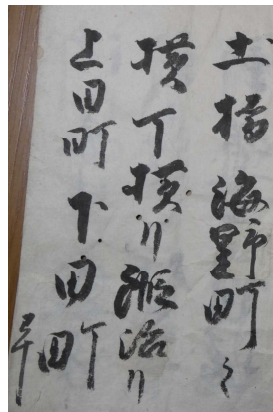
七軒丁元会所
丸堀 四軒丁
四ツ門 松原



御殿裏 車坂
鷹匠町 切通シ
常田丁 海野町裏



町方之事
紺屋町 柳町
木町 原町之



土橋 海野町之
横丁横町(?) 鍛冶町(?)
上田町 下田町

【コラム 徳本上人と浦里・越戸地区】

『上田市誌 歴史編 近世の庶民文化（上田市誌刊行会 平成16（2004）年 3月）』の26～27ページに以下のような記述があります。

文化13年3月中旬に江戸を出立した徳本は、中山道を北上し、4月初旬に上田に入っています。4月3日に、願行寺で6文字名号を残し、4月6日に芳泉寺でも6文字名号掛幅を残しました。4月7日に坂本宿心光寺 … 中略 …

上田での講話を聞きに行ったひとりに藩医伊藤常貞がおり、その親戚の越戸の庄屋井沢篤之進宅へも出かけたようです（『井沢篤巳家文書』）。

徳本上人の上田滞在はわずか4日です。その短い期間の中で、片道約10kmも離れた浦里・越戸地区まで行くということはたいへんなことだと思うのですが、このような経緯で越戸・浦里地区に足を伸ばし、その結果、2基の徳本上人名号碑が建立されたものと考えられます。また、江戸時代に庄屋だった井澤良一さん宅に「徳本上人記念塔」があることもうなずけます。